

公開講演会要旨

「ドイツ教会闘争と罪責告白」

(German Church-Struggle and Confession of Sin)

村上 伸 先生

(日本基督教団代々木上原教会牧師、前東京女子大学教授)

1998年2月5日(木)

一 キリスト教信仰と罪責告白

モーセ、ダビデ、ペトロ、パウロといった聖書の代表的な人物は、いずれも自らの罪を自覚してそれを告白した人々であった。長い教会史も、教会が自己を正当化した時には必ず墮落し、真実な革新は常に「罪責告白」と結びついて起こったことを示している。

二 「告白教会」の抵抗と罪責告白

ナチスの暴虐な支配が始まった時、「ドイツ的キリスト者」はナチスを支持し、これが後にヒトラー公認の「帝国教会」となった。良心的な牧師たちは「牧師緊急同盟」を結成してこれに抵抗、やがて一般信徒をも加えた「告白教会」に結集して「教会闘争」を展開する。だが、この闘争を単なる主導権争いとするのは正しくない。根底にはドイツ教会の「罪責告白」があったのであり、それは『バルメン宣言』(1934年)の成立過程に徴しても明らかである。しかし、この抵抗も1938年以降衰退し、遂に挫折するに至る。

三 戦後のドイツ教会と罪責告白

戦後のドイツ教会は、このことの反省から再出発した。ニーメラーの『トライザ演説』(1945年8月)、『シュトゥットガルト罪責告白』(同10月)、『ダルムシュタット宣言』(1945年)などは、罪責告白が教会再建の土台であることを示している。

四 デイトリッヒ・ボンヘッフアーの場合

「なぜ牧師が暗殺計画に加わったのか」という問いは重い。しかし、彼の

生き方の根底にもやはり「罪責告白」がある。また、イエスに倣って「罪責を引き受ける」という姿勢が決定的な役割を果たしていた。ここから、あの問いへの答えを探るべきではないか。

(申込み者：松澤 弘陽教授)